

〈第1部〉13:00～ 基調講演

司会:鬼頭里枝(静岡放送パーソナリティ)

鈴木光司さん

「～新しい家族のあり方～パートナーシップと子育て」

司会: こんにちは。本日は静岡県主催「ふじさんっこ応援キャンペーン みんなで子育てシンポジウム」にご来場いただき、誠にありがとうございます。私、本日の司会進行を務めます静岡放送パーソナリティ鬼頭里枝と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

さて、本日のこの「みんなで子育てシンポジウム」は、県が取り組んでいる「ふじさんっこ応援キャンペーン」の一環として行われています。「ふじさんっこ応援キャンペーン」は子育て中の家庭の孤独感や不安感を軽減し、子どもを生み、育てやすい社会を実現するため、また、地域全体、社会全体で子育てを支える機運を醸成するために本日のシンポジウムをはじめ、フォトコンテスト、テレビ、ラジオCMなどさまざまな取り組みを実施しております。この取り組みのもと、先週の静岡会場を皮切りに、本日のここ浜松、そして熱海市、富士市の計4箇所でシンポジウムを実施。浜松会場ではシニア世代による子育て支援をテーマにお送りいたします。

このあとすぐ第1部として作家の鈴木光司さんによる「～新しい家族のあり方～パートナーシップと子育て」と題した基調講演をお聞きいただきます。鈴木光司さんはみなさまご存知のとおり、静岡県浜松のご出身。平成2年に『樂園』でデビュー。その後、『リング』『らせん』『ループ』と次々にベストセラーを発表。『らせん』で第17回吉川英治文学新人賞を受賞。当時大変話題になりました。私も浜松市出身なんですが、まさに浜松の誇りでいらっしゃいます。最新刊『鋼鉄の叫び』で日本の教育問題の本質を問うています。また、高校教師でいらっしゃった奥様に代わり、二人の娘を育て上げた経験を持ち、文壇最強の子育てパパと自称されております。

それでは鈴木光司さんをお呼びいたしましょう。拍手でお迎えください。

鈴木: どうもみなさん、こんにちは。いま紹介されたように、僕は浜松出身で、実家があるのが浜松の鹿谷町なんですけども、もちろん今東京に住んでいます。昨日、クルマで東京から浜松に来て、夕べは実家に泊まって、ここまでできたというわけですね。

うちの母親はですね、名前を鶴子といいます。僕は、妻の母親と区別するために、「つるちゃん」と呼んでいます。母親の鶴子は、すぐそこの元浜で大正14年に生まれたんですね。で、その頃というのは、なかなか自分で物事を決めることができなかった。うちの母親の鶴子には、少女時代、といっても16、17歳のときかなあ、許婚がいたんですね。同じ元浜に住んでいる年の一つ二つ上の男の人でした。うちの母親は鶴子という名前で、その許婚の名前は亀太郎といいました。どうしてこの二人が許婚になったかというと、うちの母親のそのまた親、僕からみると、じいさん、ばあさん、それから亀太郎さんのおとうさん、おかあさんが、「鶴と来れば亀だ」というわけですね。お前たち結婚しないで、どうだと上の世代が勝手に決めたんですね。別にうちの母の鶴子と亀太郎さんは、自発的に愛し合っていたわけではどうもなかつたらしい。ところが、時は太平洋戦争間近、亀太郎さんは出征していました。そして、ある日のこと、うちの母親の元に戦死の報、悲報が届きました。こうしてうちの母の鶴子は、許婚を失いました。



戦前からうちの母親は浜松電電公社というところで働いていて、戦後もずっとその仕事を続けました。戦後1年経った昭和21年頃ですね、うちの母親の職場に、恭平、鈴木恭平という男の人が、転勤してきたんですね。その恭平は鶴子を見て、一目惚れしました。そして、強引にアプローチをかけて、恭平は鶴子と結婚することになったんですね。その鈴木恭平というのが僕の父親です。

うちの鈴木恭平はですね、生まれが浜松の北の方にある大瀬町の出身です。家は農家をやっていて、恭平自身は電電公社、旧の逓信省に務めていました。母親と同じ職場だったんですけども、半分農業、半分サラリーマンのような兼業農家というのでしょうか、周りは田畠に囲まれた本当に田舎でした。

うちの母親は元浜で浜松の市街地で生まれて、非常に田舎の方にお嫁に行きました。嫁いだものの、うちの母親は街に戻りたくてしょうがなかったんですね。もう、田畠に囲まれた田舎から脱出して街中に移り住みたくてしょうがなかった。そこで、僕が幼稚園に入るか入らない頃だと思うけど、うちの母親は決意します。でも、母親は電電公社で得た給料のほとんどを家計に入れてたんですね。だから、自分で自由になるお金はあまりなかった。その中からどうにかこうにかやりくりして、へそくりのように自分で自由になるお金を貯めてたんですね。時は昭和30年代、高度経済成長になったとき。うちの母は同僚の助言に従って、自分が貯めたお金を全額株に投資しました。したらこれが増資增资を繰り返し、株価がものすごく上がりました。そしてうちの母の元手が30倍に膨れ上がりました。うちの母親はそのお金で、鹿谷町に40坪の土地を買って、そこに家を建てたんですね。そして僕は、小学校の1年のときに積志小学校から広沢小学校に転校してきたんです。

いまの自分の基本を、僕は広沢小学校すべて手に入れたような気がするんですね。僕が最初に小説を書き始めたのも広沢小学校。僕にとっての一番最初の文芸との出会いは、小学校4年のときだったんですね。広沢小学校の3年、4年のときの担任の先生は、菅沼先生という女性の先生で、非常にユニークな方でした。ある日のこと、僕たちのクラスに宮沢賢治の伝記を持ってきて、クラスの全員に一冊ずつ配りました。世界偉人全集の中の一冊で、箱のケースに入っているような立派な本でした。先生は、それを一人一人に渡して、「明日までにこの本を読んでくること」と言われたんですね。小学校4年生の子が、一日で一冊本を読むのは、これはなかなか大変です。結構、分厚い本でした。しかし、読んでこいと言われたか

らには読もうと思って、僕は必死で読みました。そして、そこで僕は宮沢賢治という詩人であり童話作家である人を、初めて知ったんですね。どのように思ったかというと、その生き方にものすごく感動しました。自分と似たタイプの人がここにいるなっていうのをすごく感じて、なんか勇気づけられるような思いがしたんですね。そして僕は、宮沢賢治を真似て、まず詩を書き始めたんですね。大学ノートに書いていきました。そんなようにして、僕と文芸との出会いというのは、クラスの担任の先生から教えてもらいました。それがきっかけです。

そして、小学校4年の夏休みに入る前に、菅沼先生が僕たちの前でこう言いました。「今回の夏休みは、みなさんには宿題を一つも出しません」僕たちはそれで大喜びしました。僕らが子どもの頃っていうのは、夏休みの友という問題集があつたんですけども、「夏休みの友を夏休みが始まる前に授業で全部終わらせてしまおう。そして君たちには宿題はなしだ。夏休みは思いっきり遊びなさい」と言つた。実際にその通り、夏休みに入る前に夏休みの友は全部終りました。夏休みに入る直前に菅沼先生は、「しかし、一つだけ注文があります。この40日間の夏休みに、みなさん一つだけ自分がみんなに自慢にできることを身に着けておいで。そしてそれを9月1日の始業式の日にみんなの前で発表してごらんなさい」と言つたんですね。「水泳が好きな人は毎日プールに行って、プールに行ったという印鑑を押してもらってもいい。そして、その日焼けした顔をみんなの前で見せればそれでいいんだよ」と。それでいいんだ、何をやってもいいんだと。

それで僕は、そうだ、書き始めたばかりの詩を思いっきりたくさん書いてみようと思った。大学ノート2冊に自分の詩をどんどん書きました。いろんなことを詩に書こうと思い意識してこの世界を見るといろんな見え方が出てくる。普通にしているとなかなか見えないようなもの、ものを書こうと思つて見ると見えてくることがいっぱいあるんですね。大学ノートにいっぱい書いて、9月1日に先生のところにそれを提出しました。すると先生は、「鈴木光司君は詩を書いてきました」とみんなの前で言ってくれて、このように言ってくれたんですね。「鈴木光司君の詩は、明るい未来を予感させるとてもいい詩です」と。何か勇気づけられて、そうか、ものを書くって楽しいことだな、素晴らしいことだなっていうような、そういう実感を得たのがきっかけとなりました。

さて、小学校の5年、6年になるとまた違う担任の先生、神谷先生という男の先生になりました。この神谷先生は小学校の先生ですから、特定の担当教科があるわけではないんですけども、基本的には国語という教科を熱心に勉強された先生だったんですね。国語に非常に力を入れた。そして、僕たち生徒にとにかく文章を書け、文章を書けと、とにかく文章を書くんだというふうにいっぱい書かせていました。その中で、毎日日記を書くという課題を与えられた。その課題の量が1200字、原稿用紙3枚です。小学校5年、6年の子どもにとって、毎日1200字書くのはとても大変です。だから、全員が毎日書いていたわけじゃないです。書いたり書かなかったりで、出す人は段々減っていました。そんなとき僕は、小学校のときに出会ったマブダチ、親友と、ちょっと張り合ってしまったんですね。「卒業するまでの半年の間、毎日日記を書き続けようじゃないか」というような男同士の張り合いをしてしまったんですね。その結果、毎日僕は自分で自分の首を絞めるようなもので、日記を書かざるを得なくなつた。ところがもう普通の日常だとなかなか書くネタがない。困ったなあ。でも友達との張り合いには負けるわけにはいかない。友達同士で卒業まで毎日書こうと言つた限り絶対それは守らなくちゃいけないと。そうだ、現実の日常の中に書くネタがないんだったら空想の世界のことを日記に書こうと思って、空想の世界のことを日記に書き始めたら、それがそのまま小説になつたんですね。

ちなみにこのとき僕と張り合つた僕のマブダチというのは、皆さんご存知だと思います、現浜松市長の鈴木康友です。鈴木康友とは、小学校の頃からのマブダ

チです。すっといい意味でいろんなことを張り合つたり、勉強を教えあつたりとか、お互いに成長しあうような関係でやってくることができました。

僕は日記の代わりに小説を書いて、先生のところに提出しました。やっぱり小説書くっていうのは、ちょっと恥ずかしかったんですね。それで、僕は鈴木光司という本名ではなくて、ペンネームを書いて先生のところに出しました。そのペンネームというのは今言つても恥ずかしいようなペンネームなんですけども、まあ、気になる方もいらっしゃると思うので、恥を承知の上で教えますけども、「はれはれひれ太郎」というペンネームでした。今思い出しても反省すべき点がいろいろあるかと、まあひどいペンネームだなあと思っていましたけれども、そんなペンネームを書いて出しました。そしたら先生は、僕がペンネームで書いた心情を理解してくれた。そしてみんなの前で、このように言いました。「君たちのクラスの中で一人だけ、日記の代わりに小説を書いてきた生徒がいる。一つみんなの前で朗読してあげようではないか。ただし、誰が書いてきたのかは言わないよ」僕がちゃんとペンネームを書いたというところを、気持ちをわかつてくれて、あえて本名を隠した上で、みんなの前で朗読してくれました。そして朗読したら、僕のクラスメートたちずっとこうやって聞いていました。読み終わった後に、担任の先生は、「この小説を書いた人は、作家の才能があるかもしれないね」って言つてくれたんですね。僕はそれを聞いて、心が舞い上がるような感じになりました。やっぱり文章を書くつていうのは非常に楽しいことだな、素晴らしいことだなっていう実感を深めました。その書きかけた小説のタイトルは今でも覚えています。『七つの海の冒険旅行』というタイトルです。そして、それは全部で原稿用紙45枚まで書き進みました。45枚までいったところで、先の展開がまったくわからんくなって、未完のまま終わってしまった。



その『七つの海の冒険旅行』というのは、子どもたちが巨大ないかだで、太平洋を横断していく物語なんです。その小説を書きながら、実際僕も大人になつたら自分の力で太平洋を横断しようと決めたのもその頃です。この前ちょっと間寛平ちゃんにお会いしました。間寛平ちゃんには先を越されてしまったけれども、いつか機会があったら太平洋を横断しようと今でも着々と準備を進めています。もういつでも太平洋を横断できるように、ヨットの航海術であるといったものの経験は十分に積んできた。あとはいつでもタイミングを見計らって横断するだけという段階に来ています。

僕の小学校5年、6年の担任の神谷先生が、僕に最初に小説を書くきっかけを与えてくれた先生。神谷先生はその後校長先生を務めて、浜松文芸館というところに再就職したんですね。学校の先生を退官されてから、浜松文芸館の副館長のようなことをしていました。そのときの館長が、僕の中学校の時の国語の担任の武村先生です。で、武村先生と神谷先生が浜松文芸館になるべく若い人に来てもらいたい。若い人に来てもらって、ものを書いたり読んだりするということの面白さを知つてもらいたい。そのためには、現代の作家の展示物をやろうではないかと。